

③地元 STAY で、 「選べる地域の魅力」プレゼント！

8市町村にお住まいの先着 800 名様限定！
8市町村の宿泊施設に泊まって特典利用券をもらおう！

- 対象期間は9月1日（火）～11月15日（日）
 - 応募締め切りは11月20日（金）
 - 宿泊地以外の市町村で使える特典利用券などがもらえるよ
- ※特典利用券は 12月6日（日）まで有効。
※特典利用券が届くまでは1週間ほどかかります。

【プレゼントの例】

弘前再発見！
ふかぐ、あさぐ、まちあるき体験参加
& オリジナルTシャツ



特典利用券の利用イメージ

8市町村の宿泊施設を利用

領収書を撮影してホームページから申し込み
「選べる地域の魅力（特典）」を選択

特典利用券がメールで届く

利用したい日をご自身で予約

「選べる地域の魅力」を体験！

スタンプラリー応募用紙

8市町村の参加店でお買い物しよう

参加店で市町村の
スタンプをもらおう

参加店および応募箱
設置場所はこちら→



ひろさき	くろいし	ひらかわ
いなかだて	FREE ※8市町村どこの スタンプでも OK !	にしめや
ふじさき	いたやなぎ	おおわに

— 景品内容 —

特賞（スタンプ9個）
津軽広域8市町村にちなんで、
80,000 円分の商品券＋
8市町村特産品詰合せ 各抽選 1名ずつ
100,000 円相当×合計 2 名

1等（スタンプ9個）
特産品詰合せ 各抽選 10名ずつ
10,000 円相当×合計 20 名

2等（スタンプ5個）
特産品詰合せ 各抽選 30名ずつ
5,000 円相当×合計 60 名

3等（スタンプ3個）
特産品詰合せ 各抽選 70名ずつ
2,000 円相当×合計 140 名

博物館のお宝拝見

第6回 竹森節堂「関興」

本作品は、1959（昭和 34）年に枡形クラブが運行したねぶたの見送り絵として実際に使用されたものです。主題である「関興」（かんこう）は三国志に登場する名将・関羽の息子です。関羽は「美髯公」（びぜんこう）とも呼ばれ、ねぶたにおいても見事なひげを蓄えた勇猛な武将の姿で描かれます。一方本作品の関興は、やや線の細い若武者の姿で描かれています。関興は219年に父を亡くし、若くしてその跡を継ぐことになりました。軍師の諸葛亮からも将来を嘱望されていましたが、その数年後に亡くなってしまいます。関興の見送り絵は、そうした薄命のイメージも相まって、凛々しくも儚げな余韻を感じさせます。また本作品に描かれる関興の姿は、葛飾戴斗（かつしかたいと、葛飾北斎の弟子）が挿絵を

市立博物館が所蔵するお宝を、毎月紹介します。
■問い合わせ先 市立博物館（☎ 35-0700）

担当した『絵本通俗三国志』に描かれている関興の姿を抜き出したものです。ねぶたは見上げて鑑賞するため、本来の戴斗の描いた関興よりは頭の部分が大きく、観衆から見えやすいように描かれています。工夫が施されています。ねぶた絵師が浮世絵や読み本の挿絵を参考にしていることを端的に示す作例でもあります。



本作品は、9月13日（日）まで市立博物館で開催されている「弘前ねぶた展 ～節堂と龍峡の世界～」で見ることができます。夏の終わりの思い出に是非、足をお運びください。

弘前の偉人たち

第6回 新聞で国民主義をつらぬいた人 陸羯南



陸羯南（くがかつなん）は、1857（安政 4）年に在府町に住む中田謙斎（けんさい）という弘前藩の侍の家に生まれました。しかし、後になって、親類にあたる陸家を再興したため、姓が中田から陸に変わりました。羯南というのは号（文学者や画家などが本名のほかにつける名前）で、本名は実（みのる）といいます。羯南が最も力を注いだのは、新聞「日本」の発行でした。今は書くことや話すことなど、言論が自由の時代ですが、発行時の明治時代は、自由にもものを書くことは難しく、当時の政府のやりかたや政治に対して、鋭い批判を加えたため、新聞「日本」は強い取り締まりを受けました。発

市教育委員会が発刊している「新・弘前人物志」から、弘前が生んだ偉人たちを毎月紹介します。皆さんが知らなかった偉人と、出会えるかもしれません。
■問い合わせ先 教育センター（☎ 26-4803）

行停止処分は30回にも及びましたが、それに屈することなく、最後まで自分の考えを貫きました。新聞人としての面目をつらぬいた熱血あふれる人でしたが、反面、後輩たちの面倒をみる、心あたった包容力のある人でもありました。俳句・短歌で名をなした正岡子規も、羯南に助けられて世に出た人です。34歳の若さで亡くなることになる子規を、仕事と生活の両面から生涯見守りました。

「弘前人物志」は、弘前が生んだ傑出した人物を、中学生の皆さんに知ってもらいたいという目的で1982（昭和 57）年に初めて発刊されました。紹介した人物をもっと詳しく知りたい人は、「新・弘前人物志」をぜひ一読ください。

